
イキザマ！

砂鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イキザマ！

【著者名】

砂鈴

N9488C

【あらすじ】

鈍感な親友。そしてその親友に恋する幼馴染、学園のアイドル、委員長、先輩、後輩etc・・・。そして俺は一言「はあ、世話が焼ける」

0・「善い奴だもんな

中学の卒業を控えたある日、俺は屋上で幼馴染の女と向かいに会っていた。

「どうしたの？ 珍しいね。明人君が呼び出すなんて」

俺はずつと迷っていたが決心した。この言葉を言えば俺たちの関係は終わってしまうだろうとしてもだ。

「そうだな。卒業も近いし良い機会だからな」

同じ高校に進学することは既に決まっていたが、これ以上引き延ばすこともないと思つた。

「？」

幼馴染の女は首を傾げて、俺が何を言いたいのかわからぬいようだった。

「俺はお前が好きだ。付き合つてほしい」

俺は雪の瞳をただ見つめていた。何秒ぐらい見つめ合つていただらつか。やがて先に目をそらしたのは雪だった。

「・・・」めん

雪はただ一言。

「・・・響か?」

ときどき思つことはあった。雪が響に向ける視線は俺とは違つと。
「うそ」

幼馴染の俺たち二人は仲が良い。こんなことで俺たちの仲は崩れない。でも、

「わかった。けどこれからは俺雪のこと口比谷って呼ぶ。だから口比谷も佐伯って呼べ」

名前で呼ばれると期待しちまつからな。

「なんなのそれ?」

暗い顔をしていた雪が微かに笑つた。

「ケジメだよ」

俺はそつと笑つた。響、今田だけお前と幼馴染だったこと恨むわ。
だって、響が超善い奴だつてよく知つてるからな。

1・「桜のみで散りたかった

「佐伯君、今度の日曜日つて暇?」

学食できつねうどんを食べている俺に話しかけてきたのは、幼馴染の日比谷雪だった。日比谷はその手に持っていたカレーを俺の向かいの席に置いた。

「んー、特に予定はなかつたはずだが?」

部活に所属していない俺は大抵の週末は暇している。

「んーとね、私その日バトミントンの試合があるんだよね」

俺はそこまで言われて理解した。見に来て欲しいところだろう。これまでにも何度も呼ばれていたからわかる。

「わかつた。響を連れてけばいいんだろう?」

日比谷は妙なところで恥ずかしがり、響を直接誘えないのだ。本当に神様も酷なことをさせる。

「いや、別に響君は関係ないんだよ、うん」

俯いてしまった日比谷。図星と言つていいようなものだ。幼馴染なんだから強引に拉致つてしまえばいいものを。

「了解。一人で行くのも寂しいから響と行くわ

一人がさつさとくつつけば俺も楽になるんだがな。

「え？ うん、そうだよね。一人は寂しいよね」

そう言つて笑顔でカレーを食べる日比谷。単純だ。まあ、好きな人が応援に来てくれるときわかつたら嬉しいだろつ。

「・・・ほんとバカみてえ」

二人の仲を取り持つ義理なんてないのにな。

「？ 何か言つた？」

それでも俺は日比谷の笑顔が見たいから、

「いいや、何でもないよ」

いくつもの嘘を並べるんだろう。

・・・ああ、俺つてまだ諦めきれないのな。

「やっぱ、俺つてバカだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9488c/>

イキザマ！

2011年1月18日15時21分発行